

# ケニアの図書館と防災

## — ナイロビの事例 —

岸 真由美

### ● ケニアの災害の概要

ケニアはアフリカ大陸東部に位置し、東側はインド洋に、西側はビクトリア湖に面した国である。この国で多い自然災害は、早魃<sup>かんばつ</sup>、洪水、地滑り、落雷などである。地震も日本に比べれば規模が小さいが起る。最近の例では、二〇一一年に東アフリカ地域を襲った大旱魃、二〇一二年の大雨期中部および西部で頻発した洪水や地滑りがある。

人的災害では火災と交通事故が多い。特に前者については、多数の犠牲者を出した大規模火災がこの数年で何度か起きている。火災の要因としては漏電や雨漏りによる電気系統のショートなど、電気配線のトラブルが多いと言われる。またその他の人的災害として、暴動やテロ関連の爆発などが考えられる。

災害発生時、図書館などの情報センターは所蔵・保有する資料・情報の被災をできるかぎり防ぎ、館内の利用者の安全確保につとめる必要がある。また迅速な対応をとるため、普段からの防災への備えが重要となる。

本稿では、ナイロビ市内にある公共図書館二館と大学図書館一館の聞き取りをもとに、ケニアの図書館における防災への取り組みの事例を紹介する。聞き取りはケニア国立図書館サービス（以下、KNLS）が運営するナイロビ図書館、ブルブル図書館と、ナイロビ大学中央図書館（正式名称はジョモ・ケニヤッタ記念図書館。以下、JKML）で行った。

### ● 図書館の想定災害Ⅱ火災

ケニアの図書館で最も想定される災害は火災である。KNLSナ

イロビ図書館では過去に一度漏電による小火が起きている。他方、火災以外の災害はあまり想定されていない。雨期に豪雨が続きと道路や家屋がしばしば冠水するナイロビだが、この三つの図書館は水害による被災の経験がない。また、KNLSの職員によれば、暴動やテロによる被災の可能性は低く、二〇〇七年の選挙後に起きた暴動でもKNLSの公共図書館はいずれも被害を受けなかった。理由は

イロビ図書館では過去に一度漏電による小火が起きている。他方、火災以外の災害はあまり想定されていない。雨期に豪雨が続きと道路や家屋がしばしば冠水するナイロビだが、この三つの図書館は水害による被災の経験がない。また、KNLSの職員によれば、暴動やテロによる被災の可能性は低く、二〇〇七年の選挙後に起きた暴動でもKNLSの公共図書館はいずれも被害を受けなかった。理由は



KNLSブルブル図書館正面玄関 左手に非常階段が見える



KNLSブルブル図書館の消火設備

図書館が商業的価値の高い施設ではないためだろうということである。各図書館の具体的な防火対策は次のとおりである。

### ● 公共図書館

KNLSはケニア国内の公共図書館を運営する公的機関である。公共図書館サービス部とナショナル・ライブラリー部の二つに分かれており、公共図書館は全国に五八館ある。ナショナル・ライブラリーは国の法定納本図書館として国内の出版物を網羅的に収集・保存し『ケニア全国図書目録』を出版する。

ナイロビ図書館はナイロビの市街地にある最も早くに開館した公共図書館で、施設内にナショナル・ライブラリーを併設している。ブ

ブル図書館は二〇一一年に開館した最先端の公共図書館で、ナイロビ市内のブルブルと呼ばれる中流階級が住む住宅地区にある。

火災への備えとして、ナイロビ図書館もブル図書館も普段から電気設備等の定期保守を実施しており、各階にそれぞれ火災報知機、消火器を配置し非常口や非常階段、誘導用サインを設けている。また煙や熱の感知器はないが、後者ではCCTVで各階の監視を行っている。

防災訓練・研修も行われており、ナイロビ図書館が防災訓練を年二回程度、ブル図書館が研修を四半期に一度の頻度で実施している。防災訓練では消火器を使用した消火訓練も行っているが、消火器は使い切りで使用後に補充が必要となるため一回の訓練で多くは使用できないとのことだった。ま



KNLSナイロビ図書館 一階書架の脇に設けられた非常口（右奥）

た、災害時の負傷に備え救急箱も部署毎に用意しており、利用者に對しては、初回来館時の利用登録と併せて非常口や火災時の対応などを説明している。

ナショナル・ライブラリー部を併設するナイロビ図書館の施設内では、全国の公共図書館に配送される図書の一括収集・一括整理が行われている。全館が利用する図書館システムの目録データもこの施設内で管理されている。そこで被災によるデータ消失のリスクを分散するため、データのバックアップを同施設内とナイロビ市内の別の二箇所（ブル図書館と保守会社）の計三箇所に保存している。

### ●ナイロビ大学中央図書館

ナイロビ大学はケニアの国立大学のみならず東アフリカのなかで



JKML 中央部吹き抜けの階段の壁に設置された火災報知機（丸い機器）

もトップクラスの総合大学である。同大学の中央図書館であるJKMLはナイロビ市内のメイン・キャンパスにある。

ナイロビ大学では災害時に迅速で安全な避難行動を確保し被害を最小に押さえるため、キャンパス内で避難場所を指定し、大学全体の災害管理手順を定めている。JKMLも災害時にはこの手順に従う。

JKMLの建物内には防火設備として、粉消火器と消火栓（各階約三方所程度）、ガス消火設備、火災報知機が設置され、非常口と誘導用サインが設けられている。施設や設備の保守については委託会社が行っているが、それとは別に図書館員一名が施設管理を担当している。担当者によれば、重要性は認識されているが技術・手続き上の問題で防災訓練は実施していないとのことだった。

図書館システム用の機器はJKMLの建物内に設置されており、そのデータはナイロビ、モンバサ、キスムに点在する各キャンパスの図書館で共有されている。以前はデータバックアップの方法としてテープを用いて定期的に手動で実施していたが、現在はナイロビ市

内の別の場所にあるチロモ・キャンパスから遠隔操作によるオンライン・バックアップを行っている。

### ●終わりに

ケニアの図書館では火災を主要な災害と想定し、これに最低限備えた設備になっている。ただ防災訓練は徹底されていない。JKMLの施設管理担当者も緊急時にはパニックに陥り適切な対処ができないのではないかと懸念していた。地震に対する図書館の危機意識は低いが、建築基準法には耐震に関する規定がないためケニア国内の建造物の耐震性は総じて低く、マグニチュード五程度の地震でも建物が倒壊する可能性があるとの指摘もある。また、暴動や爆発の直接の対象にはなりにくいとしても、二次的に被害を受ける場合もある。地理的環境、各種情勢、海外の災害事例を考慮しながら、できるだけ想定範囲を広げて、万が一に備えた対策を準備することが今後の課題のように思われる。

（きし まゆみ／アジア経済研究所  
在ナイロビ海外派遣員）